

明日の 東洋学

Research and Information Center for Asian Studies (RICAS)
Institute of Oriental Culture, University of Tokyo

非文字史料に見るアジア文化遺産研究の“近代” —戦前期の関野貞における中国建築研究—

徐 蘇斌

清朝建築関係史料について

大田 省一



「清西陵全図」

当研究所には、ユネスコの「世界の記憶 (Memory of the World)」に登録された中国の「清代様式雷建築図档」に相当する文書類が1651点、図様が53点保存されている。上図は世界遺産である河北省清西陵の全体像を描いた『清西陵全図』（本所図書室特別貴重書）であり、代々清朝御用の营造を取り仕切った雷家の工房で制作されたものと推定されている。皇帝やその側近に見せるため、山水画と建築配置図としての役割を併せ持つ独特の表現様式を確立した図面である。（解説：井上直美 東アジア部門技術補佐員）

非文字史料に見るアジア文化遺産研究の“近代” 戦前期の関

徐 蘇斌

現在、文化遺産をめぐる研究は文化遺産学の創出へと新たな展開を見せつつあるが、そこでは、アジアの文化遺産の存在、またその保存事業の動向に、国際的にも熱い視線が注がれている。当該遺産については、すでに20世紀前半、建築、美術、考古学など、広範な学問領域で調査・研究がなされていたが、これらの成果は明日の文化遺産学の第一歩と言えるもので、遺された当該非文字史料は今日、文化遺産の保護、研究の重要な基礎的資料となっている。本稿では、戦前期、東京帝国大学建築学科の教授であり、退官後、東方文化研究院東京研究所の研究者となった関野貞（1868 - 1935）が遺した非文字史料に基づいて、中国建築遺産研究の黎明期の様子を振り返ってみよう。

アジア文化遺産に関する最初の「科学的」記録 関野貞の非文字史料の状況

関野が遺した非文字史料については、かつて、フィールドワーク・カードに基づいた拙論を試みたが（『東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム 関野貞と中国建築史研究』『日本研究』国際日本文化研究センター紀要、第26集、2002年）その後、藤井恵介（建築学専攻准教授）を代表とする関野貞資料の調査チームが学内に組織され、2003年から日本・韓国を含む本格的な全非文字史料の調査に入り、その成果として、『東京大学コレクションXX関野貞アジア踏査』（藤井恵介、早乙女雅博他編、東京大学出版会、2005年。以下、『関野貞アジア踏査』と略称）が纏められた。また、関野貞の資料群における全体の状況については、藤井恵介の「関野貞の資料群 保存状況と解説」（前掲書『関野貞アジア踏査』）に詳しい。そこでまず、中国に関する資料の保存状況を紹介しておきたい。

現在、纏まった形での関野資料は総合研究博物館にて保管・管理されている。それは、『関野貞アジア踏査』の本体をなし、内容的には、フィールドワーク・カード（以下、「カード」と略称）写真、拓本、地図、図面、スケッチなどからなる。そのうち、中国に関するカードは600余枚に上る。現存するカードは第4回目の中国調査が行われた1918年以後のものである。試みに、カード以外の一次資料群の状況を示すと（表1）のようになる。当該資料群は写真と拓本がその多くを占め、建築・石窟群は写真として、拓本は工芸類に集中して収められている。

建築学教室に保管されている資料は、関野が建築学科在職時に収集したものと思われる

（一部は総合研究博物館に保管）。藤井の「関野貞の資料群 保存状況と解説」に紹介されているように、その資料には乾板写真、拓本、図面と遺物が含まれている。当該資料の整理は韓国、日本から着手されてきたが、中国については未だ系統的な整理には至っていない。

また、「東方文化学院東京研究所旧蔵写真資料データベース」は、東洋文化研究所が所蔵する古写真資料の整理・保存・公開を目的として、2004年秋から始動した調査・整理プロジェクトで、特に東方文化学院東京研究所旧蔵の写真ガラス乾板、キャビネフィルム・コレクションをその内容とする。これまでの調査で判明したのは、関野と関わる資料は計22冊、1,000余枚にわたるキャビネフィルムで、それは関野とその助手・竹島卓一が撮影したものである。また清末の図面も関野と関係しており、『東京大学東洋文化研究所所蔵清朝建築関係史料目録』（大田省一・井上直美編、東京大学東洋文化研究所東洋学情報センター、2004年）と『東京大学東洋文化研究所所蔵清朝建築図様図録』（同編、東京大学東洋文化研究所、2005年）に報告されている。それらは主として、清朝の工部組織・様式房雷氏（通称様式雷）の図面で、その一部はすでに東洋文化研究所のホームページ上に公開されている。

動画資料については、関野の助手・竹島卓一の遺族により貴重な調査ビデオが東京大学に寄贈されている（2005年）。撮影時期は不明であるが、その内容と関野のカードを併せて見ると、1934年に撮影されたものと推測される。目的は主に熱河、赤峰、慶陵などの遺跡調査にあった。

当時、中国における古跡研究では、文献や絵図などの時代考証はあったものの、対象を「芸術」、あるいは「様式」という美術史的観点から研究していた訳ではなかった。保

表1 東京大学総合研究博物館所蔵の関野貞に関する中国資料群（2003年整理）

| 資料群分類 | 細部分類内容 | 写真 | 拓本 | 地図 | 図面 | スケッチ | 合計 |
|-------|-----------|------|------|----|----|------|------|
| 建築 | 承德 | 191 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1153 |
| | 遼金 | 107 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| | 陵墓 | 503 | 0 | 0 | 9 | 0 | |
| | その他 | 315 | 0 | 0 | 23 | 5 | |
| 仏教彫刻 | 石窟 | 250 | 0 | 0 | 8 | 0 | 265 |
| | 仏像及びその他 | * | 0 | 0 | 0 | 7 | |
| 工芸 | 碑文及び画像磚、石 | 285 | 1265 | 0 | 3 | 30 | 1882 |
| | その他 | 109 | 179 | 0 | 1 | 10 | |
| 絵画 | 絵 | 10 | 0 | 0 | 0 | 0 | 11 |
| | その他 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | |
| その他 | 雑件 | 6 | 0 | 2 | 0 | 1 | 9 |
| 合計 | | 1777 | 1444 | 2 | 44 | 53 | 3320 |

注：*は未整理

野貞における中国建築研究

存における様式の物理的継承という点で言えば、建築の即物的側面から、様式の形態をはじめ、比率、また色彩などを再現する必要がある。その最も有効な手段となるのが写真撮影と言ってもよく、その意味で、近代的技術は研究者に真正性と効率を提供したと言える。

翻って、写真技術が中国に導入されたのは1840年代とされている（上海撮影家協会、上海大学文学院編『上海撮影史』上海人民美術出版社、1992年）。ただ、19世紀末から20世紀初頭における中国の写真業は人物を中心とした商業的撮影がほとんどで、調査や研究のためではなかった（伊東忠太『西遊六万里』北光書房、1947年）。所謂、建築写真なるものは至って少ない（こうしたなか、1906 - 09年にドイツ人エルンスト・ボアシュマン（Ernst Boerschmann）が中国調査を行い、『Die Baukunst und Religioese Kultur der Chinesen, Bd.1, Berlin, 1911』が出版されたことは特筆されてよい）。

関野のこうした資料群は、「科学的」手法により中国の文化遺産を記録した最も古い情報源となっており、今日の文化遺産研究、また真正性に基づいた修復にとって極めて貴重な資源と言える。

学際的な研究の原点 陵墓研究の実像復元を例に

関野貞の中国調査は都合10回にわたって行われた（具体的な各回の調査については、拙論「東洋建築史学の成立に見るアカデミーとナショナリズム 関野貞と中国建築史研究」（前掲書に詳述）。そのうち、第4回目（1918年2月20日 - 10月13日）となる文化遺跡調査は、関野にとって最も長い中国調査であった。その調査成果は、『支那仏教史蹟』（1925 - 1931年）、さらに『支那文化史蹟』（1939 - 1941）として纏められている。

関野は日本を皮切りに、すでに朝鮮の古跡についても同様に台帳を作っていたが、これに中国を加えたことにより、東アジアにおける文化遺産を比較文化的に総覧するという方法論上の目論みが窺える。これより以前、1909年に清朝民政部が古物調査の内容を定め、省毎に調査が実施に移されたり、1917年には北洋政府内務部による古物調査がなされてはいたが、当時にあっては中国人建築学者の養成が遅れていたため、学術的調査と言える程のものではなく、写真や映像といった記録媒体の点でも乏しい内容のものであった。その意味で、関野など日本人研究者の調査・研究の成果は、中国における最初の学術的価値の高い文化遺産台帳ともなっている。

関野の広範な研究の中でも、とりわけ陵墓の研究は彼の一生を通じて取り組まれた研究であり、抑も東方文化学院時代、最初の研究テーマは「支那歴代帝王陵研究」であった。

関野の陵墓研究は朝鮮の古墳から始まり、1902年には悉皆調査に着手されたが、これは日本との比較を念頭置きながらなされたことは次の引用からも見て取れる（『韓国建築調査報告』『東京帝国大学工科大学学術報告』第6号、1904年）。

「此等墳墓ノ内部ノ構造終ニ調査ノ機ヲ得サリシヲ以テ断言スヘカラサルモ或ハ我ノ古墳ニ於ケルカ如ク石槨石棺等ヲ蔵シタリシモノカ更ニ後日ノ調査ヲ待ツ。」

また、中国陵墓調査については、関野は「他の国民との関連性」（『支那の陵墓』『歴史地理』第11巻第5号、1908年5月）に注目していた。つまりそこには、東アジアの陵墓を総合的に研究することにより、陵墓を通じて、相互の文化的影響関係を解明しようとする姿勢が貫かれている。

中国陵墓の調査では、本文7冊（600字詰原稿用紙1,000余枚）、図版9冊（写真、実測図300余）に及ぶ膨大な研究報告が竹島卓一によって整理され、併せて帝王陵の配置や平面の実測図なども作成された（『支那内地旅行談』外務省文化事業部講演、1931年）。陵墓の調査は関野が最も力を注いだ研究であったが、不運にも戦災で焼失し（関野克『建築の歴史学者関野貞』上越市立総合博物館、1978年）、日の目を見ることはなかった。ために現在、関野の陵墓に関する研究の解明は困難な状況に置かれている。

ここで陵墓を例にして（主に非文字史料を用いて）、関野の調査の復元的作業を試みたい。（図1）は乾隆陵に関するノートの一頁であり、（表2）はカードにより判明したことに基づいて作成したものである。

一覧して気づくのは、関野の調査が各朝代の陵墓のほとんどすべてに関わっていたことである。遼の陵墓が鳥居龍蔵により調査された以外は、ほぼ関野の先駆的調査であったことが知られる。

東洋文化研究所には、関野と竹島が撮影したキャビネフィルム1,000余枚（整理番号「CF」）を記載）が収蔵されている。これらは主として陵墓の記録である（図2）。

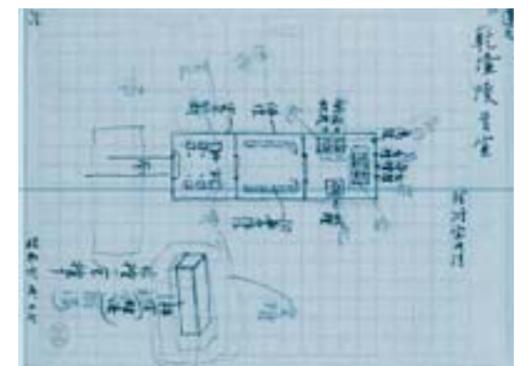


図1 乾隆陵ノートの一枚（東京大学総合研究博物館所蔵）

表2 関野貞の中国陵墓調査票（フィールドワーク・カード、『支那の建築と芸術』などにより作成）

| 朝代 | 調査内容 | 調査年 |
|----|---|---|
| 史前 | 紹興禹廟及禹墓 | 1918年調査 |
| 周 | 文王陵、武王陵、成王陵、康王陵、孔子墓、伯魚墓、子思墓、孟子墓 | 文王陵、武王陵、成王陵、康王陵は1906年調査 孔子墓、伯魚墓、子思墓、孟子墓は1907年調査 |
| 秦 | 秦始皇帝陵 | 1906年調査 |
| 漢 | 惠帝安陵、景帝陽陵、元帝渭陵、魯孝王墓石人、武氏祠、孝堂山石室、牧城子漢代古墳 | 惠帝安陵、景帝陽陵、元帝渭陵は1906年調査 魯孝王墓石人、武氏祠、孝堂山石室は1907年調査 牧城子漢代古墳は1932年調査 |
| 南朝 | 梁墓石物、張家庫梁墓石獅、梁蕭侍中神道石柱、忠武王蕭愔墓、梁安成康王墓、梁靖惠王墓、淳化鎮梁建安敬侯蕭正之墓、句容梁南康簡王蕭績墓、句容梁陶宏景墓、梁臨川靖惠王蕭宏墓、侯村石闕及石獅一對、宋樹村石闕、梁蕭正立墓、丹陽吳越王墓、丹陽劉宋太祖文皇帝陵、蕭景墓 | 梁墓石物、張家庫梁墓石獅は1918年 その他は1930年調査 |
| 北魏 | 文明太皇太后陵 | 1931年史料調査 |
| 唐 | 太宗昭陵、高宗乾陵、德宗崇陵、唐孝敬皇帝恭陵（河南） | 太宗昭陵、高宗乾陵、德宗崇陵は1906年調査 唐孝敬皇帝恭陵（河南）は1918年調査 |
| 後梁 | 王彦章墓 | 1907年調査 |
| 宋 | 東方南陵（太祖陵、永昌陵）、西陵（太宗陵、永熙陵）、太宗皇后陵、南宋孝宗永阜陵 | 太祖陵、永熙陵は1906、1918年調査 太宗皇后陵、南宋孝宗永阜陵は1918年調査 |
| 遼 | 慶陵、農安遼石棺 | 農安遼石棺は1932、1935年調査 慶陵は1934年調査、1937年竹島卓一によって撮影を完了 |
| 金 | 金陵（房山）等 | 1906年調査 |
| 明 | 十三陵（北京、永樂長陵、嘉宗德陵、世宗永陵、定宗景陵、英宗裕陵、明憲宗茂陵、孝宗泰陵、明武宗康陵、毅宗恩陵、神宗定陵、明光宗慶陵、明仁宗獻陵）、孝陵（南京）、中山王徐達墓 | 孝陵（南京）1918年調査 その他は1931年調査 |
| 清 | 清太宗昭陵（北陵）、太祖福陵（東陵）、東陵（定陵、順治孝陵、乾隆裕陵、昭西陵、順治孝陵）、西陵（光緒崇陵、雍正泰陵、道光慕陵、慕東陵、西陵、嘉慶昌陵、昌西陵、雍正泰陵、泰東陵、泰妃陵）、紹興會稽山清墓 | 清太宗昭陵（北陵）、太祖福陵（東陵）、紹興會稽山清墓は1918年調査 その他は1931年調査 |

所蔵目録には、『支那文化史蹟』を再版するため法蔵館にフィルムを貸し出したというメモが残されている（1973年）。再版では書名を『中国文化史蹟』（1975年）に改められ、新に1巻（第13巻）を加えたものとなった。

この際、当該フィルムから写真が採録されていることは疑いないが、それはあくまで一部に過ぎない。明の十三陵を例にすれば、所蔵目録には266枚あるが、『支那文化史蹟』には14枚、『中国文化史蹟』には4枚しか収録されていない。つまり、未公表の陵墓写真が極めて多いのである。キャビネフィルムの中には、南朝・宋・明・清の陵墓も収録されており、さらに陵墓以外にも関野の主な研究・遼時代建築、熱河が含まれているので、焼失した陵墓の写真群とは異なるにせよ、関野の陵墓研究の全体像を把握するための貴重なデータと言えよう。今後とも、調査を要する点である。整理番号の根拠は不明であるが、総合研究博物館に保管された関野の写真資料（同一の整理番号、関野印がある）から類推するに、整理番号は関野自身による可能性が高い。

一方、関野は中国の陵墓の調査とならんで朝鮮の楽浪、

高句麗などの陵墓の調査にも従事していたが（「特集 関野貞と朝鮮古跡調査」『考古学史研究』第9号、2001年5月）、そこに見られる両者の違いは如何なるものであったのだろうか。

まず指摘しておきたいのは、朝鮮の木造建築については高麗時代以前のものは存在していなかったため、関野が石造建築、陵墓に着目した点にある。同様に中国でも、遼時代以前の木造建築は当時は発見できなかったため、石窟や陵墓が研究対象とされた。

しかし、可能とされる調査の程度や手段は国によって



図2 梁太祖建陵右石闕正面
（東京大学東洋文化研究所蔵）

様々であった。朝鮮の古墳と比べたとき、中国の陵墓は地上の構築物部が多く、勢い、陵墓の研究と言えば建築学、考古学に跨る。加えて当時の中国では、1909年以後、陵墓を含めた古跡の保存に関する制度が施行されたため、自由な発掘はできなくなっていた。それに対して、「日韓併合」による朝鮮、ならびに日露戦争後に駐留権を得た満洲では、事実上の「植民地状況」を利用して、日本主導により多くの考古学的調査が行われた。ちなみに、1909 - 1915年まで、関野は都合40件に上る古墳の発掘調査（露出、開口を含まず）に参加している（内田好昭「日本統治下朝鮮半島における考古学的発掘調査」『考古学史研究』第9号、2001年）。

こうした当時の状況により、関野の中国における陵墓調査は様式史的研究の性格が強いものとなった。つまり、中国の陵墓の瓦、地上部の建築の様式から陵墓の文化史を考察するものとなっている。また、様式雷の营造関係の原図が大量に残されていたので、非文字史料の活用、すなわち歴史学からのアプローチも関野の陵墓研究の特徴と言えよう。その意味で、関野の研究は歴史学、美術、建築学、考古学と、関係学問領域を横断する学融合的なものとなった。

関野は思想家ではなかったが、当時のイデオロギーと無縁ではなかった。彼は近代における複雑な日中関係の中で中国の建築研究および保存事業に携わっていたのである。彼の保存活動を評価するとき、彼を支えたアジア文化遺産観と合わせて考察する必要があるが、この点については、拙論「関野貞と中国古物古蹟保存事業」（前掲書『関野貞

アジア踏査』）で検討を試みたので、ここでは割愛させていただきます。

おわりに

近代における東洋学研究は一方で、日本人、日本文化、あるいは日本美術、日本建築などの源流を探るという近代ナショナリズムを起因とする側面を有している。そしてその研究は、現在創出されつつあるアジア文化遺産学の原点ともなっている。

関野貞の研究は多岐にわたるが、個別の研究テーマの表層を通して見た、文化遺産研究黎明期における“近代”の特徴としては、次のようにまとめることができようか。

(1) 同時代に生まれた近代的な技術（写真撮影、実測）を積極的に導入し、伝統的な記録方法（建築指図、拓本など）を継承しつつ、近代的研究方法の礎を築いた。また一方、その成果は、現在のアジア文化遺産研究にとって、「科学的」記録の原点（遺産）となっている。

(2) 当時は、今日のような学問の細分化（専門分化）は未だなく、一方で、「アジア」に関する諸学が再編される時代にあった。美術学、歴史学、考古学、建築学にわたる総合的な文化遺産研究が関野の研究の特徴であったが、当該研究には有効であった。こうした研究方法は、現在、文化遺産研究が文化遺産学へと新たな展開が望まれるなかで、改めて「学際」的研究の有り様を提示している。

（天津大学建築学院教授）

清朝建築関係史料について

大田 省一

はじめに

過去の人間の営みがかたちになって残っている、という点では、建築というものはそれ自体が貴重な歴史資料だということもできる。中国歴代王朝は都城、宮殿、さらに運河や城壁など、さまざまな大規模構築物をつくったが、どれも皇帝の威厳を示すべく豪壮につくられたものが多い。その造営は、まさに国家の一大事業であった。

これらの建設過程の一端をたどれる史料が東文研に所蔵されている。一連の史料は、行政文書や通信文書などの「清朝建築関連文書」と、建築図面や敷地図などの「図様」があり、清朝の建築・営繕に関する史料としては国内最大規模のものである。また、文書と図様が対応して残っている点が一大特徴であり、しくみとかたちの両面から建築物に迫れるものとなっている。内容は、文書では光緒帝の陵墓である崇陵の工程に関するものがほとんどを占め、図様

でもその半数は陵墓関係、中でもやはり崇陵に関するものが最多であるが、他に園林、行宮などがある。崇陵は辛亥革命によって工事が中断されるが、その後民国による清室優待条件により工事が再開され1915年に完成、まさに清朝最後の大規模造営である。その詳細がつぶさに観察できる点からも、これら史料はたいへん貴重なものであり、技術的、建築芸術的な面のみならず、社会、経済、政治史の観点からも興味深いものである。

清朝建築関連史料について

東文研所蔵の崇陵工程文書は、工程報告、設計図書、建設予定地に関する報告書、の3つに大きく分けられる。工程報告は崇陵造営担当の承修大臣宛に送られた書類・電報・通信文で構成されており、工事進捗状況の報告から造営事業の様子が事細かに覗える。設計図書と予定地報告で

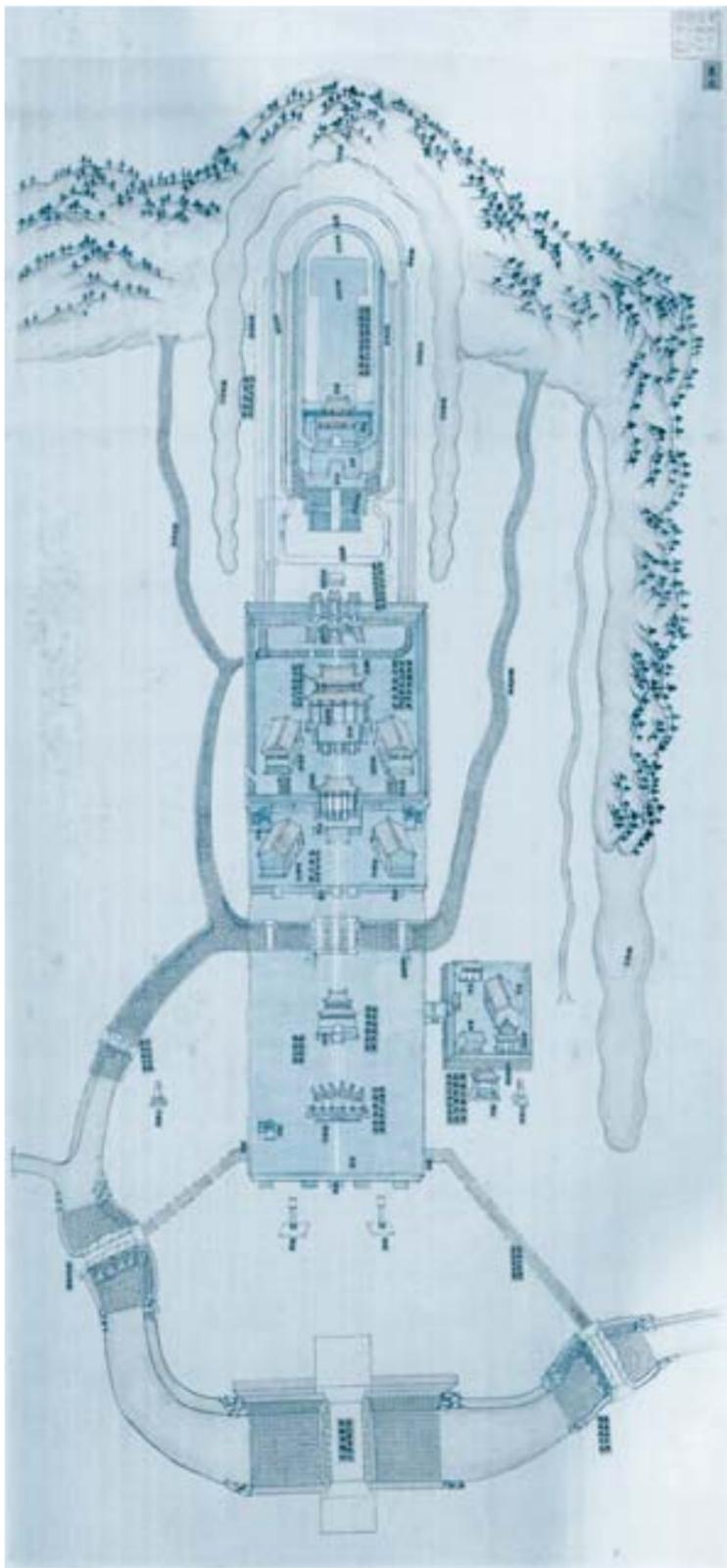


図1 清同治帝惠陵立様図

は、「堪輿」(風水)から「引河水勢」など伝統的世界観に従った土地の見方が示される一方で、火車敷設予定線・時刻表が添えられており、電報による文面が多いことと併せて、近代の波が確実に押し寄せていたことを示している。

図様は、東陵・西陵の全体配置図、敷地選定に必要な地勢図や堪輿図、各皇帝陵墓、妃園寝等の計画図に大別される。陵墓では木造架構を持つ楼閣建築だけではなく、皇帝の棺を納める地宮をはじめ、その上部の盛土部分である宝頂、排水施設、さらにゆるやかな勾配を取って上昇感を演出する敷地構成まで、独特の構造が見て取れる。図面上でも多彩な表現がみられ、山並みや水系、樹木等は彩色された山水画の描法で、楼閣・殿舎や風水壙などの建物は細かい立様図で描かれて、その図法の違いが際立つ。建築立面の表現では、中庭を中心とした展開図になっているものと、斜投影で擬似的にパースをつけているものがあり、さらに隅部では45度の角度で無理やり展開させるなど、いくつかの表現手法がみられる。平面図・断面図などの線画は正しくスケールダウンして描かれていて、正投影図法になっている建築立面とともに、存外近代的な図面であることに驚かされる。計画図では、査穴という、皇帝の棺を置く位置を風水師が占った結果を示した図、その吉穴の位置決めをして陵墓の中軸線を赤い線で示した計画原図があり、皇帝陵の計画立案の様子がよく判る。他には、頤和園、静宜園、静明園といった皇家園林や、今は中国共産党指導部が陣取る中南海

を含んだ三海などの図もある。陵墓とはうってかわってこちらは北京市内の市街地に位置するため、都市空間の変遷を考える際にも有用な記録である。これら図様には黄色や赤色の付箋が大量に貼り付けられ、建物の名称、構法、寸法、樹種、方角などが事細かに記されており、建築学的に図面を解析する際の重要な参照データとなっている。

史料の来歴 i

東文研の清朝建築関連史料は、『荒木文書』と呼びならわされてきた。これはそれら史料が荒木清三という日本人により収集されたことによる。荒木に関しては遺族が未だ見つからないためその人となりは判然としないが、工手学校(現工学院大学)を卒業後、1910年に清国に技手として雇われている。その後も北京に留まり、主に建築施工・工事請負の分野で活動していたようであるが、東方文化学院の関野貞及びその助手であった竹島卓一の建築調査など、日本からの学術調査にも参加していた。当時関野の主たる研究テーマは中国歴代皇帝陵の研究であり、昭和6年(1931年)には北京周辺の明清代の陵墓調査を行い、荒木がこれに調査助手・通訳として同行している。この中で、荒木は陵墓の実測などを手掛けている。北京時代の彼の周囲には、関野をはじめ後の营造学社(中国伝統建築の研究機関)の設立メンバーとなる中国人建築研究者グループとの交流があり、このような中で彼自身も伝統建築の調査研究にも興味を抱き、文書史料や図様を収集するようになっていったようだ。荒木自身は1933年には亡くなるが、遺族により彼の所蔵史料が東方文化学院に売却され、戦後の学院改編を経て現在に至るのである。

荒木文書が陵墓関連のものが多いたのは以上のような経緯

によるもので、関野、竹島、そして荒木といった先達の学術的関心を反映したものであった。その他、彼の蔵書は東文研図書館で閲覧公開されており、中国建築研究の上で大きな遺産を残したといえる。

史料の保存と活用

この一群の清朝建築関係史料には、冊子体の漢籍や洋装本の整理システムではカバーしきれない文字・絵図・拓本・写真等の史料も含まれており、その重要性にもかかわらず研究・整理・保存の対象にはなりにくいものであった。しかも、図様は表装されてはいるが大型の軸物となり、扱いにくい上に紙質の劣化が進んで閲覧には適していない状況だった。そこで東洋学情報センターにおいて、清朝建築関係史料の整理、目録・解題の作製、デジタルデータ化を企画し、系統立った整理をすすめてきた。その成果として、『東洋文化研究所所蔵清朝建築関係史料目録』と『東洋文化研究所所蔵清朝建築図様図録』が出版されている。図様に関しては高精度のデジタル画像化も行っており、本図の劣化を心配せずに図面を閲覧することが可能になった。その際には、各図様に貼りこまれている付箋上の文字まで詳細に判読できる精度でデータ化したため、研究資料として十分に活用することができる。以上によって、基礎的な点から研究基盤の整備が進められてきた。

東文研の清朝建築史料群は、中国、台湾からも研究者が訪れ、その史料的価値に高い評価を得ている。2004年に北京で開かれた「様式雷図档国際学術研討会」ならびに「清代様式雷建築図档展(展覧会)」(様式雷とは清代の御用建築家集団であった雷氏のこと)には、中国国家図書館と並んでアメリカ・コーネル大やフランス極東学院等とともに

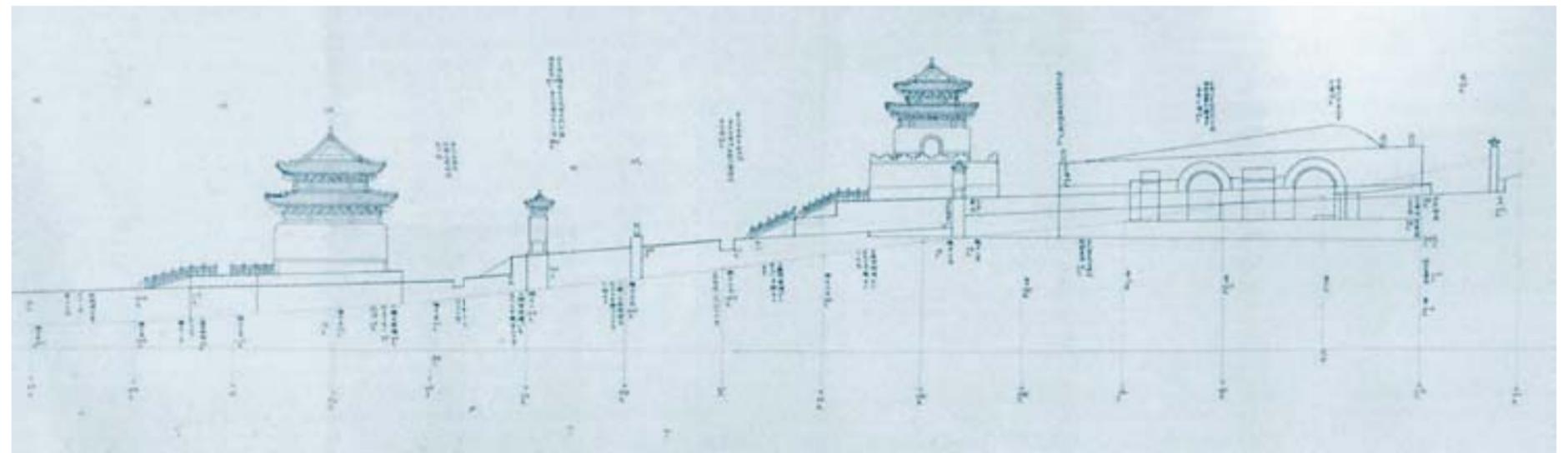


図2 清咸豐帝定陵立様図(一部)

参加し、収蔵史料・研究状況の紹介を行った。展覧会ではデジタルデータによる図様の複製を出品し、各国から持ち寄られた図様のレプリカと並べて展示された。通常、軸物の搬送は取り扱いがたいへん困難だが、データ化によってこのような機会を持つことも容易になり、図様の比較対照が可能になった。清朝建築研究は、こうして世界的な規模での研究協力が必要な段階になっており、東文研所蔵の史料もその一翼を担っているのである。

これらの文書・図様を詳しくみると、ほぼ1世紀前の伝統中国世界の最後の姿が立体的に目の前に立ち上がってくる。皇帝の長しえの居処を定めるためにデザインに苦慮した担当者、巨大な官僚組織の中で与えられた役割を果たそうとした役人、はたまた相次ぐ重労働から罷業を企てた工人の姿まで、王朝最後の大事業の様子がありありと感じ取れることだろう。

(東京大学生産技術研究所助教)

i 史料の来歴は、井上直美による『東洋文化研究所所蔵清朝建築関係資料目録』の「解題」による。その他、荒木文書や図様の基本事項も同文中の記述を基にしている。

センター便り

・平成19年度漢籍整理長期研修

1980年度、センターの前身である東洋学文献センターから実施してきた漢籍整理長期研修は、今年で28回目となった。前期6月18日から22日まで、後期は9月3日から7日までの計2週間。参加者は、大学図書館・公立図書館等の職員6名と院生6名であった。受講後それぞれの所属機関で、研修の成果を活用している。講師として、東洋文化研究所のスタッフに加えて、所外10名の専門家にご協力いただいた。この場をかりて厚くお礼申し上げたい。建物改修計画の都合により、会場は工学部8号館で行った。今後も実施していく計画である。

・おわびと訂正

『明日の東洋学』前号(No.17)の拙文「特色ある図書館」において、長澤規矩也教授旧蔵「双紅堂文庫」の命名の由来につき、「『紅樓夢』と『嬌紅記』(孟称舜作の戯曲)の二つの善本にちなむ」と記しましたが、正しくは「『嬌紅記』の二つの善本にちなむ」です。おわびして訂正させていただきます。なお、『嬌紅記』の両善本とは『新編金童玉女嬌紅記』『新鐫節義鴛鴦塚嬌紅記』のことで、いずれも現在は京都大学文学部に蔵されています。(大木康記)

東洋学研究情報センター運営委員会委員
(2007年度)

所外委員

| | |
|-------|------------------------------|
| 西郷 和彦 | 附属図書館長 (大学院新領域創成科学研究科・教授) |
| 平野 聡 | 大学院法学政治学研究所・ 法学部准教授 |
| 川原 秀城 | 大学院人文社会系研究科・ 文学部教授 |
| 泉田 洋一 | 大学院農学生命科学研究科・ 農学部教授 |
| 國友 直人 | 大学院経済学研究所・ 経済学部教授 |
| 村田雄二郎 | 大学院総合文化研究科・ 教養学部教授 |
| 姜 尚中 | 大学院情報学環・ 学際情報学府教授 |
| 丸川 知雄 | 社会科学研究所教授 |
| 保立 道久 | 史料編纂所教授 |

所内委員

| | | |
|-------|-----|--------------------------------|
| 鈴木 董 | 教授 | 西アジア研究部門、委員長 |
| 関本 照夫 | 教授 | 汎アジア研究部門、所長 |
| 田中 明彦 | 教授 | 汎アジア研究部門 |
| 安富 歩 | 准教授 | 東アジア研究部門(第一) |
| 真鍋 祐子 | 准教授 | 東アジア研究部門(第一) |
| 丘山 新 | 教授 | 東アジア研究部門(第二) (兼)センター比較文献資料学 |
| 尾崎 文昭 | 教授 | 東アジア研究部門(第二) |
| 永ノ尾信悟 | 教授 | 南アジア研究部門 |
| 樹屋 友子 | 教授 | 西アジア研究部門 (兼)センター造形資料学 |
| 玄 大松 | 准教授 | センター比較文献資料学 |

センター長

小川 裕充 教授 センター造形資料学

センタースタッフ

小川 裕充(おがわ ひろみつ) センター長・
センター造形資料学分野教授 中国美術史
丘山 新(おかやま はじめ) センター比較文献資料学分野教授 仏教思想
樹屋 友子(ますや ともこ) センター造形資料学分野教授 イスラム美術史
玄 大松(Hyun, Daesong) センター比較文献資料学分野准教授 国際政治学
保城 広至(ほしろ ひろゆき) センター造形資料学分野助教 国際政治学

明日の東洋学

東京大学東洋文化研究所附属東洋学
研究情報センター報 第18号

発行日 2007年10月31日
編集・発行 東京大学東洋文化研究所
附属東洋学研究情報センター
〒113-0033 東京都文京区本郷7丁目3番地1号
電話 03-5841-5839(直通)
FAX 03-5841-5898
E-mail ricas@ioc.u-tokyo.ac.jp
URL http://ricas.ioc.u-tokyo.ac.jp

デザイン コスギ・ヤエ/印刷 (株)ヒライ